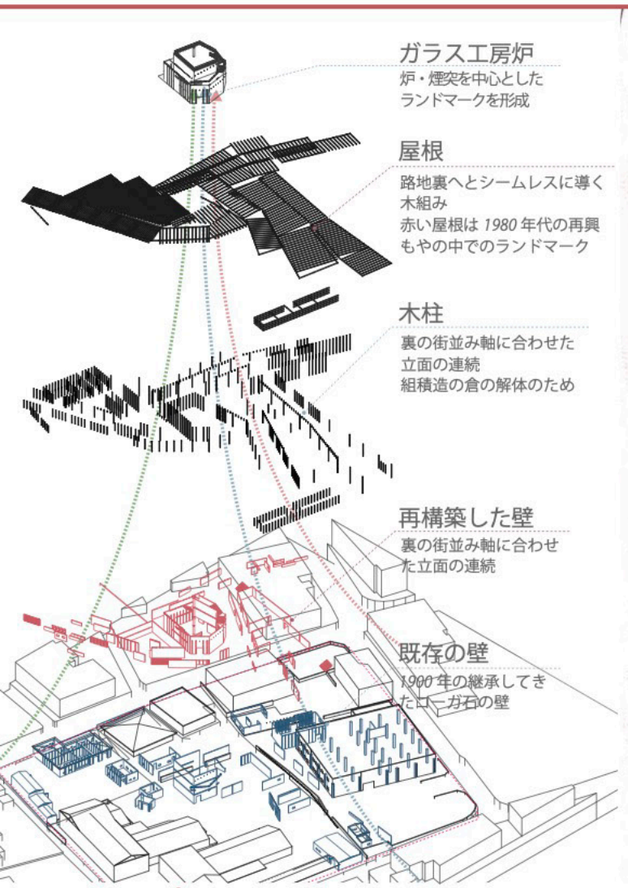
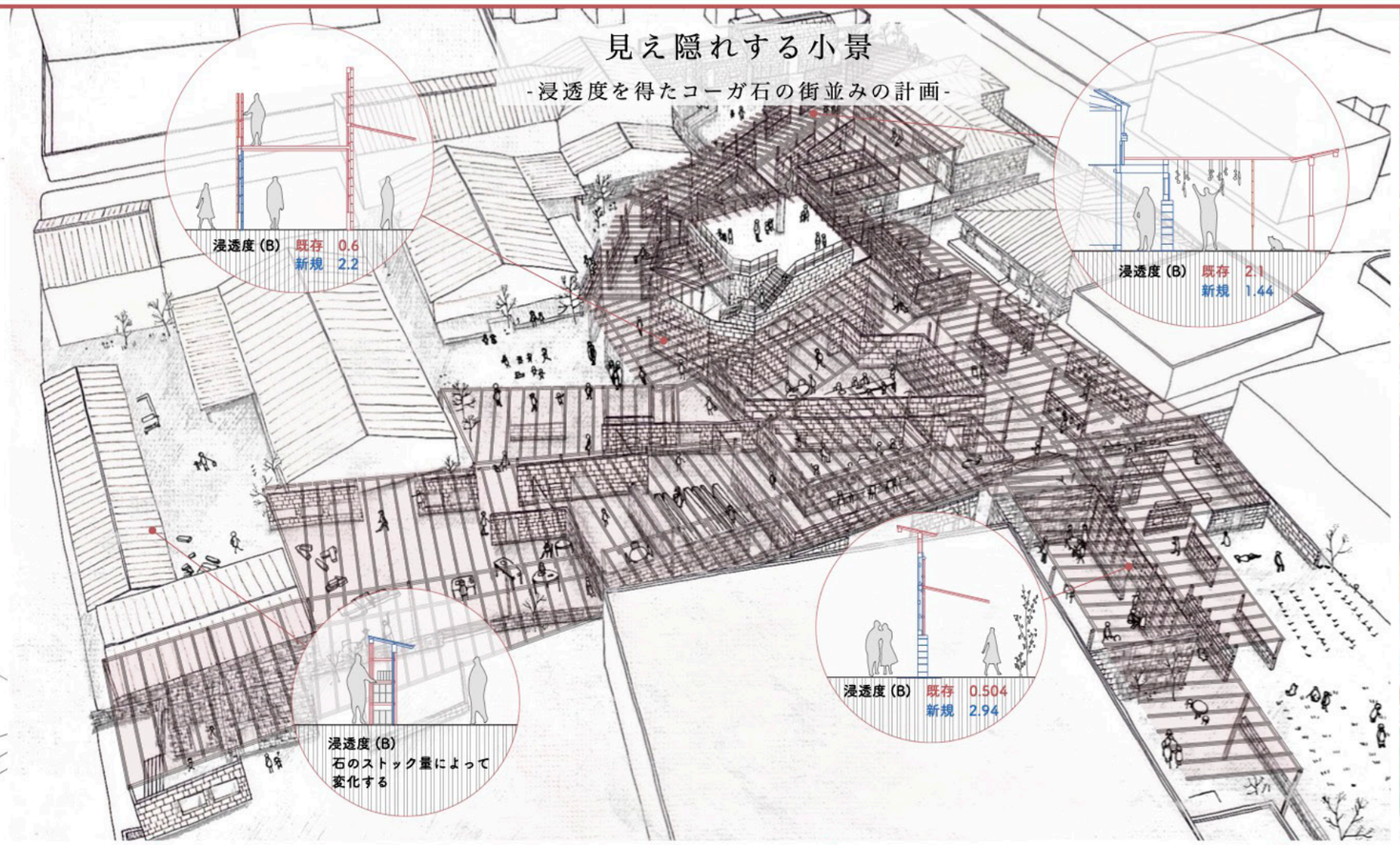
あるおじいちゃんは、自分の家の壁を削る落書きを許している。それは思い出を街並みにできるからと言う。ある男の子は、石を組み合わせるものづくりが好きだと言う。それはコーガ石が水に浮くほど軽いからである。あるお母さんは、観光客と自分の家で語り合うのが好きだと言う。それは、実家がずっと民宿を営んでいるからである。



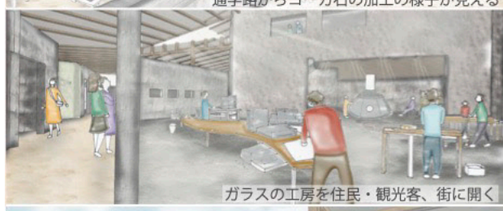
見え隠れする小景

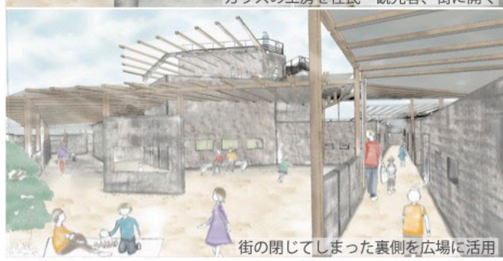
-浸透度を得たコーガ石の街並みの計画-



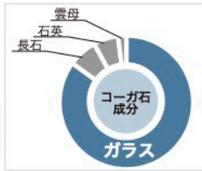
壁の再構築により繋がる

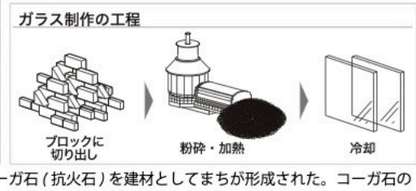
通学路からコーガ石の加工の様子が見える


ガラスの工房を住民・観光客、街に開く


街の閉じてしまった裏側を広場に活用

01. 社会背景 | まちを築いた『コーガ石』の文化



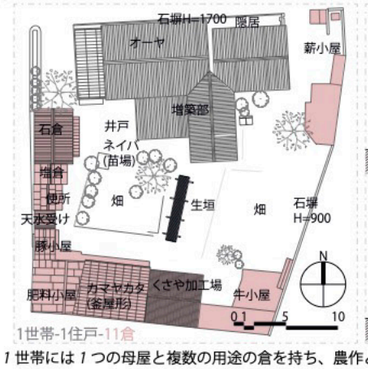


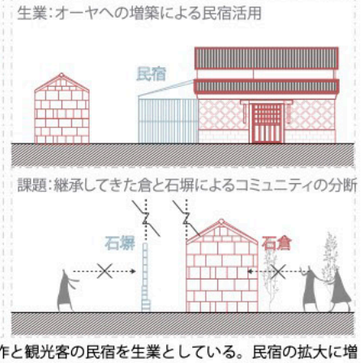
東京都新島は、コーガ石（抗火石）を建材としてまちが形成された。コーガ石の加工のしやすさから、『住民の手で建築される文化』が根付き、1970 年代にコーガ石の年間採掘量がピークを迎えるも、その後も街並みが継承されてきた。

02. 研究背景 | 維持できない街並み・建築群

1980 年以降徐々に人口減少し、繁栄してきたコーガ石の街並みにおける、多くの石造建築ストックを維持・保全できなくなった。近年、新島抗火石建造物調査会により調査が進められ、保全する動きが見られつつある。

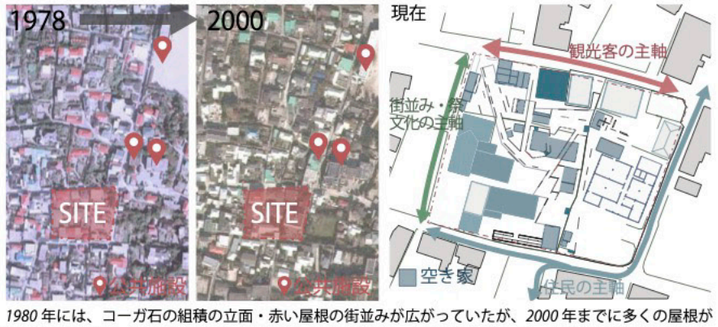
03. 調査と課題 | 居住形態と生業の調査による課題抽出





1 世帯には 1 つの母屋と複数の用途の倉を持ち、農作と観光客の民宿を生業としている。民宿の拡大に増改築を繰り返してきたが、倉は空き家となり維持するのが困難となっている。そして、代々継承してきたコーガ石の石塀や石倉がコミュニティの分断を生み、放棄が最適解になっているという課題がある。

04. 計画地 | 『街並みの保存』と『住民と観光客の交流』エリア

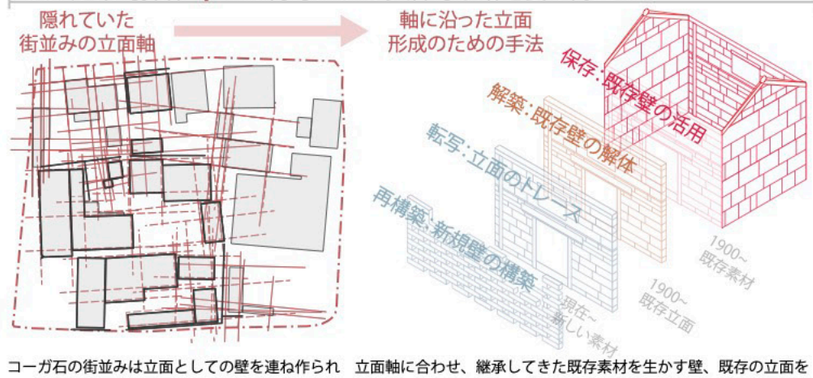


1980 年には、コーガ石の組積の立面・赤い屋根の街並みが広がっていたが、2000 年までに多くの屋根が張り替えられたという歴史を持ち、観光客と住民が交わる・祝祭の中心地・コーガ石の街並みが放棄されつつある新島村の 1 街区を計画地としている。

05. 全体計画 | 路地裏工房の形成

生活の裏側の放棄された倉に軸を巻き込み、路地裏工房を中心とした観光拠点を形成する。既存の放棄されてしまった継承すべき倉を転用し、住民の生業に合わせ課題解決を目指す。

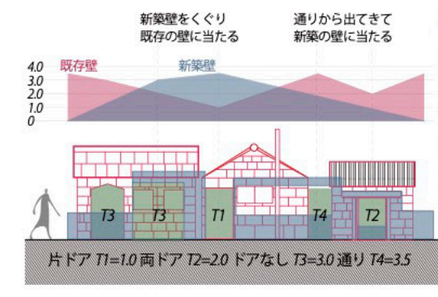
06. 建築的操作 | 壁の再考による多層的な路地裏の街並み



コーガ石の街並みは立面としての壁を連ね作られてきた。新しく路地裏へと導く立面の軸をリサーチから決定し、裏の街並みを形成する。

立面軸に合わせ、継承してきた既存素材を生かす壁、既存の立面を生かす壁、新しい立面を持つ壁を配置し、路地裏に時間的・空間的に多層な場所を作り出す。

07. 空間設計 | 選択度と浸透度を用いた空間把握と評価手法



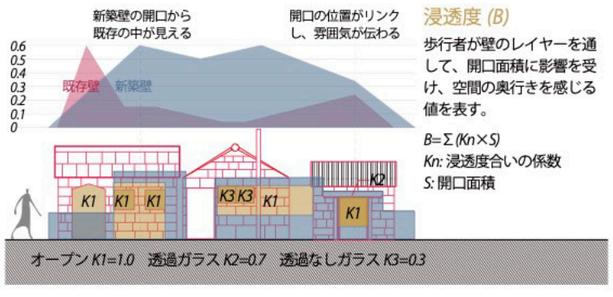
選択度 (A)

シークエンスにおいて、歩行者が入れる開口数を「選択度」とする。見えたときの入りやすさを表す。

$A=\Sigma(Tn\times M)$

Tn: 入りやすさの係数

M: エントランス数



浸透度 (B)

歩行者が壁のレイヤーを通して、開口面積に影響を受け、空間の奥行きを感じる値を表す。

$B=\Sigma(Kn\times S)$

Kn: 浸透度合いの係数

S: 開口面積

旧の壁によって構成される立面を選択度から評価をする。
選択度とは、建築の入りやすさを表していて、新築の壁と既存の壁に挟まれた空間を縫うようにして出入りすることの面白さを設計する

旧の壁によって構成される立面を浸透度から評価をする
浸透度とは、空間の奥行きを感じる値を表していて、新築の壁から建物内の雰囲気を感じることができたり、既存の壁をフレーミングしたりできる面白さを設計する。

あるお父さんは、自分で家の改修をしていると言う。それはコーガ石の成分がガラス質でノコギリで切れるほど加工しやすいからである。この新島村には、生業・産業に合わせ自らの手で作り上げた文化が根ざしている。これは、みんなが気づかなかった土地の物語を翻訳し、このまちの美しい街並みと営みを結いていくための提案である。